

ブレインタローの想像力考（下）

細井雄介

Brentano's lecture on "Phantasie" (continued from Vol. 135) —————

In the previous issue (Vol. 133) the attractive figure of Franz Brentano (1838-1917) was ascertained as a teacher of both Alois Riegl (1858-1905) and Edmund Husserl (1859-1938). Husserl was especially fascinated with a lecture which contained penetrating investigation of "Phantasie". Surely the content of this lecture is very interesting and generates the development of new ideas. On the historical relationship between the lecture and Husserl's phenomenology, especially, a vivid account is offered by the editor of *Husserliana* XXIII.

From a viewpoint of aesthetics, furthermore, the problem of "Phantasie" or imagination is seriously important. So, as before, in order not to miss any detail I have translated the whole of the lecture into Japanese here.

The original text is as follows:

Franz Brentano, *Ausgewählte Fragen aus Psychologie und Ästhetik*. in:

Grundzüge der Ästhetik. A. Francke Verlag, Bern 1959. S. 72-87 (-87).

Edmund Husserl, *Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung*. *Husserliana* Band XXIII, 1980. S. XVIII-L.

本稿の目的は後段に置く論考の翻訳紹介である。美術史学興隆時の彗星リーゲル (Alois Riegl, 1858-1905) に魅かれて、本論叢では、世に躍り出た処女作『オリエント古絨毯』全文を訳出できた。このときリーゲルの学歴譜にブレンターノの名があり、この師を仰いだ学生には後年の哲学者フツセル (Edmund Husserl, 1859-1938) もいて、リーゲルとフツセルとはほぼ同年生であることに驚いた。私生活はほとんど語らなかつたリーゲルであり、師ブレンターノとの関りも全く不明である。他方フツセルには名高い「フランツ・ブレンターノの想出」があり、これをも本論叢第百三十三集で紹介することができた。

この「想出」のなかで特筆されたのがブレンターノの特殊講義「心理学および美学の選り抜きの疑問」である。講義内容の実質は「想像力の有無」であり、美学にとって無視できない問題である。本論叢第百三十四集で「ブレンターノの想像力考（上）」と題して講義全体の訳出を志したが、リーゲルの姿を思いつつ二十世紀現象学成立時における学問的営為の一面を確かめたいと考えたからであり、(中)に続けて今回ここで作業を完了する。

訳文今回の本体は右の講義の終結部分である。続けて当該部分の「内容概観」(五二―五九)を置くが、原書の目次を成すものでもあり、すでに畏友森谷宇一教授の精査を経た全文の締めくくりである。つぎに掲げるのは、この目次に先立つ原書「編者の序言」で、本論叢第百三十四集(四二頁)において一旦中断したあとに繋げて、編者の要説を全うさせるものである。最後に本稿では、記述心理学から現象学が成る経緯を重んじて、ブレンターノの特殊講義とフツセルとの関りをやや詳しく説く一文を選んだ。フツセル全集の初期遺稿群を纏めた第二十三巻序文の一段「直観の現象学の史的源泉」である。

大戦を経た昭和三十年代の学生にとってサルトルは眩しく、書店には『想像力の問題』(平井啓之訳 一九五五年

人文書院)も輝いて、余響は『美学事典』(一九六一年 弘文堂)などに記し留められた。幸いにも今夏新たな御努力により『イマジネール』(澤田直・水野浩三訳 二〇二〇年五月 講談社学術文庫)が公刊されて、往昔あれこれのことが甦る。解説によればサルトルはフツセルへの沈潜四年を経て論考を仕上げるが、当時の世界情勢にも左右されたか、発刊は一九四〇(昭和十五)年であった。ちなみにフツセルの『イデーニー』(『純粹現象学及現象学的哲学考案』^{イデーニー}池上鎌三訳 上二九三九年 下一九四一年 岩波文庫) 公刊は一九一三(大正二)年である。

新制大学の教室では十九世紀後半を主導せる心理学から哲学へと移る思潮の動向が強調された。美学ならば、他者理解の原理たる感情移入の深化であり、了解心理学の進展であり、また批判主義を再興する新カント派の俊敏や生哲学の光彩であり、記述心理学からは現象学の創成である。現象学の芸術考察については早くも大西克禮著『現象学派の美學』(一九三七年 岩波書店)が重々しく、竹内敏雄著『文藝學序説』(一九五二年 岩波書店)の結尾ではインガルデンが特筆されていた。こうした思潮大観は学生の身にとつて自分の位置を見定めるのにありがたく、一読しては最先端がおのれかと錯覚させるまでに作用する。

だがおよそ歴史に名を留めるほどの一思想の超克とはどのような実質をもち、どのようにして果されるものなのか。この反省を、このたびの機縁、同年生リーグルとフツセルに共通の師ブレンターノなる三者の出合い如何、という関心が強いた。

想像は古来あれこれと論じられてきたが、実証を旨とする時代に生きた心理学徒ブレンターノにとつて、知覚が知覚表象であるのと同じく想像とは想像表象のことであり、意識に上る表象すなわちイメージのひとつである。相似たものが無数に存在するのであれば、それぞれを適切に区別し分類することは秩序保全のためによりしく、古く

から学問にとつての常道であつた。この道を取る布伦ターノは想像論議の歴史を辿つて相違の区別を遂行、果てに知覚と想像との対比が残り、一方の直観的にして本来的な表象たる知覚表象に対して、他方の想像表象は非直観的にして非本来的な表象であるとされる。そして非本来的である想像表象は、一部は直観の領域に入り、一部は概念の領域に入るのであり、想像表象についての固有独立の教説は存在しない。言いかえると、理論学にとつては自立できる想像論はない、と断案が下されたのである。この結論部分を成しているのが全篇を閉じる今回の訳稿であり、一八八六年に終結の特殊講義であつた。

この講義にフッセルは驚嘆した。しかし即座に深く働いたのは、この難題はこれほど簡明に割切れるものではない、と危ぶむ直覚でもあつた。本来的表象と、ここへ限りなく近付いて溶け合つてしまふ非本来的表象との区別とはなにか。幾たびも右の講義のことに触れつつフッセルは苦節の道を歩み、ついに自身の一九〇四—〇五年講義で明言する——「布伦ターノによれば想像表象とは非本来的表象であつて、あれこれの關係に取次がれ、あれこれの概念で媒介される非直接的な表象 (indirekte, durch Beziehungen, durch Begriffen vermittelte Vorstellungen) のことである。知覚という本来的表象と非本来的表象とは統覚 (Apperzeption) の在り方が違ふと考えるだけで重大な進歩となるのに、双方を区別する執拗な現象学は布伦ターノの究めるところでなかつた」(Husserliana XIII, S. LIV und S. 93)。布伦ターノの講義を聴いて二十年後、いまやようやく堂々と独自の地歩を築くフッセルの成立時、これは一九〇四年としてよいのであろう。内的時間意識の変様を鋭く究明する後日の展開は、思想史の新たな頁となつて華々しい後続の人々も立並び、サルトルもなかのひとりに算えられる。

キエムナジウム
学校で「最低の生徒」と印されて育ち、没歴史として歴史など思わぬ若者フッセルの前に布伦ターノが登場する。

まずは鋭い太刀捌き、あとは静々と古代から纏れて現代にまで綾なす糸をつぎつぎと丹念に解いては区分けし、ついに乱麻を断つ最後の一闪である。この英姿ぞ師なり、と仰いで終生の契りを結ぶが、孜々たゆまず自身の刃を研ぐ歳月は、師とのあいだの超えることのできない違いをも悟らせる。この機微が窺えて、後年の師を送る追悼文の節々に浮ぶ疎隔の悲しみは切々と胸に迫る。このときフッセルはすでに自身の剛刀で名高い次代の場面の主であった。さらに時は移ってサルトルの声も聞えたのちに、ようやくブレンターノの講義草稿が一冊の本に納められて世に出る。一九五九年のことであり、普及度を大きくするPhB本の公刊は一九七七年であった。

華麗な喧騒を経て、こうした躍動の始点と見做せる古典に立返れば、あたかも往昔の劇場舞台の名場面写真のごとく、歳月の作用は厳しく、すべては古びて侘しく見える。しかしながら思潮隆替のさまを思い、一思想の克服なるものに秘められる努力の苛烈を思えば、このブレンターノの講義録の意義も大きくて不朽である。

翻訳の底本は左記の通りだが、副本としてPhB本を傍に置き、各頁を照合しつつ訳業を進めた。

Franz Brentano, *Ausgewählte Fragen aus Psychologie und Ästhetik*. in: *Grundzüge der Ästhetik*. A. Francke Verlag, Bern 1959, S. 72-87 [-87].

: *Grundzüge der Ästhetik* [PhB 312]. Felix Meiner Verlag, Hamburg 1977.

この底本は哲学科草創期教授田邊重三先生の御蔵書から遺贈の貴重書である。忘れ得ぬ御論考「個體の認識」(京城帝國大学文学会論纂第九輯 昭和十五(一九四〇)年三月)の終結部ではブレンターノの姿も輝いていた。

「心理学および美学の選り抜きの疑問」²⁶⁾

フランツ・プレントナー

(*) この位置に前々集(第百三十四集)では本講義の出所を語る編者フランツィスカ・マイヤー＝ヒレプ
ラントの注(1)があった。講義が行われたのはウィーン大学一八八五年から八六年にかけての冬学期、初
日は一八八五年十月十七日と記入されている由である。

第一第二と二冊ある手稿綴本は編者の手で全五九節の一体に纏められての公刊となった。前集では第二九
節から第五一節冒頭の一文までを翻訳紹介したが、今集では再度第五一節冒頭から始めて第五九節の結尾ま
でを掲げる。あとに続ける「内容概観」は公刊書の目次を成すが、講義本体各節の編者による要説である。

訳者

五一、まずは問いたい——知覚(Wahrnehmung)とは何か。

知覚と言われて思うのはひとつの認識(Erkennnis)、しかも、何かがある、表象されたもの(直観されたもの)が
ある、という即応即決(unmittelbar)の認識である。だがこれではまだ知覚なる概念の本質的契機は尽きず、さら
に算えられるのは、知覚とは動機なしの認識であり、何か個体的で実在的なものの認識であって、恐らくはまた
単一(einfach 単重)なる認識でもある、ということである。

けれども、こうした補完的規定が必要であると示す前に、すでに最初の規定には何が横たわっているのか、とま
ずは明かにしたい。知覚と言われてひとつの認識を思う、とわれわれは語った。私の知覚するものについて私は、

このものが存在する、と認識する。このことを偏見なき人ならば誰しも即座に認めるであろうし、それゆえ知覚の名が「真理 (Wahrheit \wedge wahn)」とも繋がることは言うまでもない。

だがこれでは、必ずしも万人には明かでない多くのことが言われている。とりわけ、知覚は判断である、が気になる。質については、この判断は肯定的判断であり、正しい (richtig) ばかりか確か (sicher) でもあり、したがって明証的 (evident 直証的) である。しかも即応の判断であるからには即刻即座に明証的でなければならぬ。続いてなお、ただいま挙げたばかりの諸規定がさらに加わる。動機なしの即応的認識が問題とわれわれは語ったのである。即応的認識も動機をもつことは多々あって、矛盾の証明は一例である。このような動機ありの認識については、これは *ex terminis* (あれこれの概念から) という仕方によく解ると言える。このことは知覚については言えず、となれば、必然的なりとして知覚がよく解ることもない。したがって知覚はアプリアリな認識に算えられず、経験的認識に算えられるのが慣わしである。⁽¹⁰⁷⁾

(107) 下記の書を参照のこと——Franz Brentano, *Die Lehre vom richtigen Urteil*. Erster Hauptteil D, および zweiter Hauptteil A und B.

さらにわれわれは、知覚はいずれも何か個体的 (規定明確 *bestimmt*) なるものの認識を含む、と語った。さまざまの主な応用例を顧慮すれば、このことは概念に属する事柄であると容易く納得できるところであろう (全称的判断も選言的判断も仮言的判断も知覚ではない)。

だがさらにわれわれは、知覚は何か実在的なるものを捉える、と語った。真(明証的)と承認する判断 (*anerkanntes Urteil*) の対象たるもの一切は現存 (*existieren*) する。ここからの帰結として、知覚の名に値するのは内的知覚 (*innere*

Wahrnehmung) だけ、ということになる。内的知覚がわれわれに示すのは、例えば判断 (urteilen) する、意欲 (wollen) する、等々の心的現象 (psychisches Phänomen) であり、さらに精確に言えば、一定の仕方での心的に活動する者であり、すなわち表象する者、判断する者、感じる者、意欲する者としての私自身を、である。いわゆる外的知覚 (äußere Wahrnehmung) も記憶 (Gedächtnis) も各自の対象を即応的明証ともどもには捉えていない。⁽¹⁰⁸⁾

(108) この箇所はプレントナーの後年の教説に合せて変更してある。特殊講義「本書」Ausgewählte Fragen aus Psychologie und Ästhetik 起草当時のプレントナーは Reales (実在なるもの) と並べて Irruales (非実在なるもの) — immanente Objekte, Sachverhalte) をも仮定していた。下記の書を参照のこと——Die Lehre vom richtigen Urteil. Erster Hauptteil B.

なお恐らく、知覚の概念には最終の規定として、認識は単一の認識である、を加えるべきであろうと私は語った。——古くから判断は単一判断 (einfaches Urteil) と合成判断 (zusammengesetztes Urteil) 幾つかの単一判断から成る類の判断) とに別けてきたのである。もともと J・S・ミルは、この馬鹿さ加減は、馬を個々の馬と揃いの馬とに別けたいと望むほどのことと思つた。とはいえ表象を同じような具合に別ける (ミル自身すら遣ること) のは、それほど馬鹿らしいことでない。

いや、それどころか右の二分は避けられないこととしてよからう。というのも合成判断を、ある種概念と同様、一緒になつて全体を作り上げている幾つかの部分へと解消することのできない事例が証示されるからである。

例を挙げる——Ein Mensch ist nicht gelehrt. (ある人が教えられていない [学がない])。この nicht は述語に算えてもよいから、この文は Ein nichtgelehrter Mensch ist. (教えられていない人 [学のない人] あり) なる判断に等しいと

主張することができよう。けれども、この「教えられていない人なる」概念はどこから得たのか。明かに否定的判断から、すなわち、教えられた（しかも明確なる）人という仮定がなかで拒否される否定的判断からである。だが扱われているのは絶対に否定的な判断でなく、一部は肯定的にして一部が否定的な判断である。そして相似たことが他に多くの事例でも生じる。¹⁰⁹

(109) 下記の書を参照のこと——Die Lehre vom richtigen Urteil. Erster Hauptteil. D.

それゆえわれわれは古い「単一か合成か」の区別を更新して、しかもいま見たように反対を物語る事例、ことに判明なる知覚作用が区別の働き、すなわちはつきりと個々の成分に気付く働きを以て生じる類の事例が挙がるのであれば、はたして知覚と言われるや、つねに単一判断を思うのか、とさらに問わなければならないようである。

五二、知覚と言われてわれわれの理解するものがこのような仕方であつたからには、知覚表象の概念もまた明かになつた。知覚表象とは、知覚の基底 (Fundament) を成す表象のことである。

上述せる認識の契機すべてを直観できる例ならば、右に見たごとく、内的知覚の事例いづれもが提供する。いずれにも動機なしの肯定的な認識で、何か個体的にして實在的なるものを捉える即応即座の明証的認識があるのだ。

それゆえとにかく、この内的知覚は想像表象 (Phantasievorstellung) の圏外へと排除すべきであり、内的知覚についてと同じことが言えるものもすべて同様に排除すべきである。だがそもそも厳密かつ本来の意味における知覚に、なおも内的知覚以外の何かを算えることができるのか。できると仮定してはならぬと私は信じている。というのも知覚の概念は、内的知覚以外の事例では充足を得ることがないからである。

ここで俗人の判断は別様となり勝ちであり、有力な哲学者にも同じことが生じる。感官を信頼したのであり、こうして内的知覚のほかには外的知覚が区別されてきた。われわれが意欲すること（*Wollen*）や判断すること（*Urteilen*）は内的知覚の現実的対象だが、同じように、見る、聴く、等々のもの（*was*）は外的知覚の現実的対象であると思っただのである。このことの結果として、外的感官の記憶像とか幻覚（*Halluzination* [en]）のごとく、本来より広々とした想像（*Phantasie*）の領域が生じた。いとも容易く論駁できる事柄なのに、それでも普通の人々は今日に至るまで外的知覚に固執して、矛盾する経験に成程やや見向きはしたものの、ほんの一瞬だけであって、あれこれの帰結を引出してはいない。それどころか、知覚の圈内になお別なることを持込む始末が生じている。というのも普通人は、眼で見るものを知覚したと誤認するように、例えば運動や静止あるいは水の落下、等々、眼で見ないものを見るときまで誤認するからである。¹¹⁰⁾

(110) Franz Brentano, *Die Lehre vom richtigen Urteil* S. 144ff.

アリストテレスは外的知覚については普通人のあらゆる偏見を決して越え出てはいなかった人だが、それでも例えば運動や静止の知覚では本来の意味における「見る」は問題になり得ないと気付いていた。付帯的「偶然的」感覚（*αἰσθητικὰ κτὰ συβελτικόν* 『靈魂論』第二卷第六章以下）を語っているのである。このように名付けた知覚と内的知覚とを一緒にする誤りが厭でもここで目立つとはいえず、よくよく吟味すると、この付帯的「偶然的」感覚については、諸他のいわゆる外的知覚についてよりも、むしろ正しく捉えている何かがあると解る。外的知覚となれば、知覚内で表象される対象は現実的（*wirklich* 現にある）でなければなるまいことになるが、付帯的「偶然的」感覚ではただ、何かが現（*wirklich*）にあり、この何かについては知覚表象内に与えられる現出（*Erscheinung* 外見）が当の

何かの徴 (Zeichen) としてわれわれに役立つ、と言えるだけである。さしあたり少くとも、当の知覚現象 (Wahrnehmungspanomen) が徴であり、しかも何かについての規則的 (regelmäßig) な徴であることは否定されていない。そして、これは広い範囲で言えること、と経験が裏付けてくれる。諸々の現象 (Phänomen [e]) が流れゆく過程内における何らかの規則性 (gewisse Gesetzmäßigkeit [en]) は、このように見てしか把握 (begreiflich) できないであろう。ところで、外的知覚について語り続けてきたのが人々の実際である。しかしながら、いわゆる外的知覚にも内的知覚にも知覚の概念を用いるならば、目には以前の見方との本質的な隔たりがはっきりと見えてきて、知覚の概念に生じている酷い曖昧さ加減に気付くであろう。

a. 外的知覚で眼前にあるのは、癖となつてゐる期待であり、せいぜいのところ帰納による結論である。内的知覚でわれわれが持つのは即応即座の絶対確実な認識である。

β. いわゆる対象 (Gegenstand) はそもそも外的知覚表象の対象でなく、この表象の原因に過ぎず、諸他作用 (gewisse andere Wirkungen) を予言させるだけの何か、これ自身は知られざるもの (ein in sich Unbekanntes) でしかない。反して内的知覚では、知覚される対象は現 (wirklich) にある。

五三、想像 (Phantasie) の概念も首尾一貫性のないまま相同的 (homolog 同族的) に変形されてきたことは不思議でない。このことにはいかなる姿勢を取るべきか。同じ相同的変形 (homologe Umbildung) をいつまでも遂行してよいか。首尾よろしき改良 (Reform) は容易でなからう。しかし、いずれにせよ事実成分 (Tatsbestand) 全体の整理訂正によってしか改良は可能でない。

五四、われわれが何かを見たり聴いたりするときと、この何かを表象するとか、この何かについて言われるのを聴いたり、見たものについて誰かが話すのを聴いたりするときとは、明かに相違 (Unterschied 区別) が生じている。相違とは何か。さきに述べた通り「原文 S. 107 本論叢第一三五集五七頁」アリストテレスが *αισθησις αὐθεντικῆς* 「弱い知覚表象」を語っていたし、ごく最近に至るまで相似る見方は支持されてきた。しかし、この見方に異議を唱える人々が現れる。この *αισθησις αὐθεντικῆς* とはおよそ何であろうか。強度の劣る内容 (minder intensiver Inhalt) の感受のことか。——とすれば大きな激しむ (große Stärke) の思浮ぶ音 (Ton) はフォルテでなくピアニシモ、などということになろう。とんでもない仮定でないか！ では一体どのように比較すればよいか。しかもここで、「見る」に当つての「より乏しい強度 (geringere Intensität)」なるものは全く確定できていないことが加わる。より乏しい光度 (Lichtstärke) なのか、より乏しい明度 (Helligkeit) なのか。黒 (Schwarz) は最も暗い感受 (dunkelste Empfindung) だが、フェヒナーは、あらゆる色の表象は自分には黒よりも暗くなると主張し、目に映る黒 (Augenschwarz) はいかなる記憶像 (Erinnerungsbild) よりも強度の大きい印象を生むと言う。⁽¹¹⁾しかし、これが記憶像の正しい特性記述であると誰が認めようか。本質的に別なる見方も差出されているようであり、アリストテレスを崇拜するにもかかわらず、そのような見方のひとつをヨハネス・ミュラーが試みていると見える。というのも私が思うに、ミュラーも確かに想像表象と感受との内容相違 (Inhaltsunterschied 区別) を説いてはいるものの、この相違を全く別様に掴み、この相違のほかに、なお両能力の活動の仕方における極めて本質的な相違の方をはるかに大きく力説したからである。すなわち想像 (Phantasie) の活動は境界を設けつつ (begrenzend) 諸々の形式を生む (Formen erzeugend) ことにあろう、と言っているのである。⁽¹²⁾

(11) Fechner, Elemente der Psychophysik, II., S. 518.

(112) Johannes Müller: Über phantastische Gesichterscheinungen. III. (Das Eigenleben der Phantasie).

けれどもすべてこうした説明ではほとんど満足が得られないと思われる。右に述べた異議の幾つかは恐らくもはや出ないであろうが、他に残るものがある。感受と表象との強度の比較はすでに視覚ではほとんど行われもしないが、視覚以外の感覚についてはどうか。音楽の総譜を読む。このとき得る満足はどのように把握できるのか。——ヨハネス・ミュラー提唱のごとく境界と形式のうちにか。こう主張するのは難しいであろうし、あまりにも一面的に形態 (Gestalt) しか考えていないと見えるし、ここは強度や品質をも顧慮すべきところでないか。だが問題全部をミュラーの望むように解釈するのは不可能と見えても、多分その教説の一部はやはり正しいのではないか。ミュラーは内容 (Inhalt) の相違と活動方式 (Betätigungsweise) における相違とを教えてくれた。前者はすでにアリストテレスで見たように種々の困難に立至る。しかし後者は、あるいは満足をもたらさしめないか。こうして実際に示されているのが、ひとりはこのように、またひとりは別様に、と多くの人々が打開を試みてきた道である。以前は、感受と表象とでは、与えられるのは強さの点でも同じ内容 (Inhalt) ⁽¹¹⁾ だが、しかし与えられる仕方が違う (in anderer Weise) のであろうと見做された。ここではロツツェの説を思うだけでよからう。表象 (Vorstellung) は光輝や音響や苦痛をさまざまなと精確に思浮べる (vorstellen 前に置く) が、ただし再度これらを感じしない (empfinden) ⁽¹²⁾、と言っているのである。

(113) ブレンターノ後年の用語では、 *Gegenstand* (対象) と置くべきところであろう。 *Inhalt* (内容) をそのままに留めたのは、この表現をヨハネス・ミュラーが用いているからである。上注 (103) を参照のこと。

(114) Hermann Lotze, *Medizinische Psychologie*, III. Buch, § 36.

- a. マイネルトやマツハのごとき人々は、相違は全く決められないと述べている。
 - b. 他に、表象内容の強度 (Intensität) は等しいのに表象作用 (Vorstellen) の強度が小さいと仮定する人々がいる (ヘルバルトおよび同学派)。
 - c. また他に、表象作用には総じて強度を否定する人々がいる。
 - d. 最後に、感受と表象とは客体¹¹⁵への関係方式 (Beziehungswaise) の相違によって区別されると説く人々がいる。
- (115) 手稿原文には "immanentes" Objekt (「内在的」客体) とある。上注 (36) および (40) を参照のこと。

こうした試みはすべて支持できないと判明するのであり、ここでは、これらの試みをやや詳しく考察したい。

b. について。表象内容の強さ (Stärke) は等しいのに表象作用の強度が小さい、ということは総じて虚構物語 (Fabel) の王国に属する。感受作用の強さが零となり、これとともに感受されるものも零となるが、それでも現出 (Erscheinung 出来事の外見) は感受として残る、という極端な事例は、理に合わないばかりか、そもそも可能でない。感受されるものと、これに伴う現象 (Phänomen) とに、二つの強度は存在しないのである。(想像表象についても同じことが言える)。

c. について。だが、感受内容の一つなのに感受の強さ (Stärke) をあれこれ勝手に仮定するのはおかしいとして旧い教説を非難するのは正しくとも、当のロツツェ自身の新見解も上首尾ではない。感受作用 (Empfinden) には感受内容に等しい第二の強度 (Intensität) が与えられるが、およそ表象作用 (Vorstellen) に強度は与えられない、とロツツェは考えている。しかしそのように言われる強度の同等性 (Gleichheit) は誰か測ったことがあるのか。その種の異質 (Heterogenes) なるものが扱われるとき当の測定はどれほど困難であろうか。同等性が自明と見えるのであれば、理由は同等性ならぬ一体性 (Einheit) が与えられているからとなるが、われわれには感受内容 (≡対象

(Gegenstand) の強度しか意識 (bewußt werden) されない。だがこのとき、同じ対象を表象 (vorstellen) することに感受 (empfinden) することとの相違はないのである。

d) について。感受でも表象でも客体への関り方では、経験は何ひとつ特別な関係方式を示してくれない。肯定的判断と否定的判断との比較はほとんど場違いであるどころか、むしろ疑念を湧かせやすい。というのも判断では客体への関係方式の相違ははつきりと見えるのに、ここではただ窮地脱出の仮説にしかならないからである。——しかも経験の全く知らぬ何かが仮定されながら、他方では、経験内にはつきりと横たわる重要で多様な諸契機が顧慮されないことになる。例えば記憶表象 (Gedächtnisvorstellung) は(こ)に算えればよいのか。思うに感受のばあいと同じ関係方式が語られて、対象の相違は表象によって過去のもの、とか未来のもの、などにされる、ということにでもなるのであろう。

だがさらに大きな困難を示す事例は他にもある。例えば盲点の充足 (Blinder Fleck) の充足はどうか。これは幻覚か感受か想像表象か。シュトゥンプフは判断錯誤 (Urteilsrauschung) の問題であろうと考えた。マツハは充足の起ることなどないと否認した。これには充足の紛れもない経験が繰返されていて反論となる。私自身は、盲点の充足は諸他の関係方式にとってよりもむしろ感受にとつての幻覚 (Halluzination) に算えなければならぬまい、と思っている。

しかし困難はまだこれで終りとならない。ただいま取上げている見方の望むところは、感受と想像表象との相違をそれぞれ別々の関係方式によるとして掴むことにあるが、経験は、この種の相違ばかりでなく、さらになお想像表象自体のあいだにも相似た相違を見せつける。信頼できる多数の報告から明かだが、あれこれの想像表象内には段階差があり、なかで最も生氣に富む表象はもはや感受と区別されない。また誰しもみずから直観性についての完全性が、あるときは乏しく、あるときは大きく、大きくなれば想像表象が感受の表象に近付くことを体験している。

いわゆる生々しい記憶 (frisches Gedächtnis) を思うがよい (本来の残像 *eigenliches Nachbild* と取違えてはいけないフェヒナーの記憶残像 *Erinnerungsnachbild* のこと)。

このような事例は山積みに観察されて、客体への関り方が違うとするロツツエの見方を、原形としても変形の姿としても、完全に支持できると思わせるには、あまりにも多過ぎる。さきに「同じ内容ながら種々に相違せる表象作用」と言われた事柄は空想の産物 (*imaginär*) である。¹¹⁶

(116) この「d について」で挙げられた例は大幅に削減してある。

a について。ところで、相違は決められない、とする見方については何と云えばよいか。この見方が正しいとすれば、対象は等しいのに表象作用に何らかの別なる相違が存在しなければならぬということになる。

もとより真正なる相違、「区別」(*echter Unterschied*) は存在するし、同じ対象相手の表象作用あれこれに見出せる相違はこれだけでしかない。すなわち完全に直観的なる表象作用と多少とも非直観的なる表象作用との相違である。何を思っているかは、実例がはっきりとさせてくれる。直観的表象作用の例は「私は赤い四角を見る (*sehen*)」である。非直観的表象作用の例は「私は丸い四角を思う (*denken*)」である (ただし私が赤い正方形や等辺四角形や直角三角形を思うときにも働いているのは同じく非直観的な表象作用である)。それでは実例の双方は何によって区別されるか、と問うてみたい。

ある人は恐らく、非直観的表象作用の例では対象がそもそも、「本来的に」全く表象されていない (*eigentlich gar nicht vorgestellt*) と言うであろう。だが正確に見ると、これは正しくない。非直観的なるものを私は、概念の完全なる明晰性を以て考える。また別の人は、非直観的なるものは一体として (*nicht einheitlich*) 表象されない、と思う

かもしれない。だがこれもまた完全に当っているとは見えない。私の表象するのが赤い四角、どこか丸い四角であるときですら、「赤い」「丸い」「四角」は互いに結ばれて表象されるし、このように表象できるがゆえにこそ私は、赤い四角の直観的表象においても非直観的表象においても同じ表象対象をもつのである。しかしながら、表象の異なる仕方についてあれやこれやと曖昧に表現されても、あれこれの表現はいずれも、つねに真理 (Wahrheit: 裸の在り方) には触れている「核心には真理をもつ」。

われわれの表象活動 (Vorstellungstätigkeit) は一体 (Einheit) である。けれども表象されるものの部分に目を向ければ諸々の部分表象を区別することができる。となれば区分はさまざまな見地で行える。

- 一、表象自体に諸々の部分が共属していることを顧慮しての区分 (広狭両方の意味における部分直観) がある。¹¹⁷
- 二、心的機能の別なる部類クラスを顧慮し、こうした部類間に生じる相違、例えば一部分だけが肯定的判断の基底であるとか否定的判断の基底であるとか一利害関心の基底であるなどの相違を顧慮しての区分、すなわち諸部分を本来的に解消することなしの抽象がある。¹¹⁸

(117) Franz Brentano, Die Lehre vom richtigen Urteil. Erster Hauptteil C, S. 51.

(118) 判断もしくは関心の作用が全表象の一部分に関係するだけで、諸他すべての部分は捨象するゆえに (ブレンターノの言)。

ひとつの表象が部分直観であると同時に概念でもあることは可能だが、こうならないこともあり得る。しかも一方には概念でないどころか決して概念となり得ぬ部分直観があり「多角形の一部とか円弧」、他方には狭い意味どころか広い意味においても直観的ならぬ概念があるのだ「虚数」。このとき問題となるのは表象の融合 (Verschmelzung)

である。融合させるものは一纏まりの特別な関心とか判断である。こうして、同じ対象を直観的かつ非直観的に表象できる、ということが起るし、相關的に、「その非直観的表象には一体性が欠ける」、それどころか「その非直観的に表象されるものはそもそも全く表象されない」という類の表現が正当化 (relative Berechtigung) されることも理解できる。¹¹⁹ というのも統一が成るのは表象する活動自体によってでなく、他の道では共属しようもないものを一纏めにしようとしてくる別種の心的経過によってのことだからである。同じ対象を表象するときの非直観的な多々さまざまな働きもこのように理解できるし、例を挙げれば解り易い (例として「斜角のある赤い等辺四角形」)。

(119) ブレンターノ後年の見方によれば、総じて一般概念 (Allgemeinbegriff) は表象されないし、表象されるのはただ、多少とも明確に表象する人の何か実在的なもの (ein etwas Reelles) だけである。

それではわれわれの事例に立返って、これまでに見出せた事柄を活用したい。直観的な表象とあれやこれやと非直観的である表象との相違は、感受とふつうの想像表象との相違を概念的に把握させることができるのか。恐らく、等しい対象が表象されるが一方では直観的に、他方では非直観的に、とするのであろう。けれどもこの説明の試みも明かに適切でないし、合成物にしか当嵌らず、したがってここでは不十分となる (例えば大砲の轟音の強度について)。このような次第で相違は決められないとする理論「a」も駄目となる。

五五、対象における相違 (Unterschied 区別) が問題となる限りでは少くとも、アリストテレスの正しいことは否定されないし、このことは経験からはつきりと容認できる。しかも表象の強度 (Intensität) についてはばかりか、しばしば充実度 (Fülle) についても言える。他にも例えば知人を見たときと、名前が聴えて想像裡に当人の姿を表象

するときとは、与えられているのは完全に忠実な似姿 (vollkommene Treue) でないことが多い。格別このように言えるのは品質 (Qualität) についてもであり、楽器ならば音色 (Klangfarbe 音質) 等々についてである。

知覚の対象と想像表象とのあいだに、恐らく、完全な相似性 (Ähnlichkeit) は決して与えられていないが、それにしては多くのばあい、相似性はとりわけ不完全 (unvollkommen) である。自身のことではフェヒナーは、見る色と表象する色とでは自分には相似性はほとんど皆無に等しい、と報告していた。この点について諸他の感官では事情はなおさら酷いとしてよからう。

五六、したがってわれわれは、感受と想像表象とは対象が別々である、と言う。だがこの言い方は、別物 (anderes) が表象されるとしても実は同じものであるようだ、ということではないか。——この異議が出るならば、別物が表象されるのは、一方「の想像表象」では非本来的な表象作用が働いているからだ、と答えなくてはならない。このことがわれわれを非本来的表象作用 (uneigentliches Vorstellen) なる概念へと導く。⁽¹²⁾

(12) Franz Brentano, Die Lehre vom richtigen Urteil. Erster Hauptteil C. S. 62.

五七、非本来的な表象作用では間に合せの当座用表象 (Surrogatvorstellung) が与えられている。こうした表象は、肝腎要の現象 (Phänomen) は含みながらもこれを諸他契機と概念的に結付けてのことであるか、それともここには本来的 (直観的) 要素が皆無であるかである。この事態は非本来的表象作用のこととしてヨハネス・ミュラーがよく理解していた。表象と呼名とが連想で結ばれているならば、ただの呼名ですら本来的表象の代りに入り込める。このとき、想像表象と呼べるであろうものが成立する。ここには以下のことも含まれる——

一、非本来的に表象されるものを思描く本来的表象は、狭い意味での直観であるか、もしくは多数の直観から合成されるかである（例えば一連の継時的直観、もしくは一束の同時的直観であろう）。

二、非本来的表象が成立するのは主として、本来的表象に大体のところ相似的（ähnlich）な直観を介してのこと（合成された表象で肝要なのは具象的の一体となっている多くの相似的契機である）。例えば私は、白い四角の直観をもてばこそ想像（Phantasie）裡に赤い四角を思描く〔vorstellen 表象する〕。

この見方には恐らく、想像表象に入らぬ概念と対立する想像表象の部類ケラスという区画は鋭さに欠けて消えてしまふ、と注意が出るかも知れない。このことは否めないが、どうして反論にまで高まろうか。しかも相手は、想像表象の呼名が普通に用いられる領域を述べているだけのわれわれでないか。そして事実、大方の想像表象は直観でなく、直観を核とする概念（Begriff mit anschaulichem Kern）なのである。¹²¹

(121) ここに手稿原文では本書におけるよりも長く、右の定義から外れる種々の見解の説明（S. 353-359）が続く。大部分が既述文章の繰返しとなるゆえに、この箇所を本書では省いた。

とにかく想像表象という呼名を右のごとき非本来的表象に用いた世俗の人々は、真の本性は何も知らぬ見掛けの姿に当の呼名を与えてきた。きわめて広い領域が問題となり、他人の心的現象（Phänomen）が加わる事例を見れば、この領域はさらに拡大する。だが本来的の意味における他者の個別態〔個性〕（fremde Individualität）を表象することは不可能なのである。他者の個別態を表象することは、ただ自分自身の個別態〔個性〕（eigene Individualität）つまり自分自身の心的現象（Phänomen）を通つての回り道でしか可能でない。これが成るときわれわれは、例えば誰かとの相談での想像表象とか、物語や歴史や文芸においての想像表象とか、身振りや画面などを見ての想像表象につい

て語っている。他者のと相似る自分自身の心的現象の核心なる直観 (anschaulicher Kern) が何らかの抽象や概念的確定を探り出す (erfahren 経験する) のである。この例はうれしいことに、われわれがさきの観察で得た見方を確めてくれる。また、さきには別の見方を望んだ人も、今度はわれわれと同じ説明を取らざるを得ない。それならば、いつでも同じ仕方で行く方がよいのでないか。

しかも領域はさらに拡がる。確かに自分自身の心的現象のことではあるが、しかしいまはこれが現前せず、したがって (例えばこれを考えたり望んだりすれば快や苦痛の感情が湧く、ほどには) 現実的 (reell) でない、という事例を見てみよう。この例はいましたが述べた例と全く同様に把握することができる。となれば自分の過去や未来の心的現象のことも、表象されるのは、他者の心的現象についていつも行われるように、しばしば非本来的な仕方においてであることに、何ら疑問の余地はない。

未来の心的現象が扱われ、総じて未来のことが考えられるときには、さらに、遠い過去の何かが出てくるときにも、いつも同じ具合でないか。出易い疑問だが、こうした疑問のすべてに立入ることはできない。大事なのは見損じること、直観的にして本来的であると思っていた表象が、正確に見れば非直観的にして非本来的であるという、当の表象の真の本性を見損じてきた誤認のことである。

いずれにせよ想像表象と言われてきた表象は全部、すでに早くわれわれの注意した関係、直観的表象への二重の親近 (verwandschaftlich) 関係をもっている。すなわち――

- a. 非本来的に表象されるものを思う本来的表象は、狭い意味における直観的表象である。
- b. 想像表象はいわば核心なる直観 (anschaulicher Kern 直観的核心) をもつ。言いかえると想像表象は直観へと近付いてゆく。

五八、総括すれば以下のごとく言える——

一、伝統的概念によれば確かに知覚表象でないが、しかし想像表象は知覚表象に相似（ähnlich）のものとするべき表象である、ということのをわれわれは見出した。この相似性が大きければ大きいほど、それだけ多く想像表象は話題となる。

二、けれども想像表象という呼名がしばしばこの概念と合わない範囲で用いられていたことも明かになった。すなわち本来はそうでなかったものを知覚表象と思ったことで、何らかの現出（Erscheinung 出来事の外見）の本性に於いて思違いを犯したのであり、このことは格別いわゆる外的知覚について言える。

三、さらに、何らかの表象を直観的にして本来的な表象であろうと信じたのに、これが実は非直観的で非本来的な表象であったことで、ここでも思違いを犯した。例としては、完全な幻覚のことならぬ普通の想像表象であり、他者の心的現象を思う表象であり、また自分自身の心的現象でも、とりわけ未来や過去の心的現象を思う表象である。

五九、さて、このような事況のもとで何をすればよいのか、どのように想像表象（Phantasievorstellung）の呼名を用いればよいのか。

呼名の古い適用領域はできるだけ手放すまいと努めるのであれば、古い概念は棄てるか、それとも古い概念になお幾つか規定を付加えることになるのは明かである。だが規定を付加えると「想像（Phantasie）」（想像表象）の呼名は多義的（äquivok）に曖昧となろう。

想像に算えられたもの全体は二群を包括する——一、内的知覚に関係付けられた表象と、二、外的知覚に関係付

けられた表象とである。第一群は下位の二群を含んでいる——内的記憶 (Gedächtnis) の直観的表象と、心的現象を現在のか過去のか未来的とみて、直観に近付いてゆく非直観的で非本来的な表象とである。

第二群は下位の三群をもっている——a. 心的なるものの直観的で主観的な感受表象 (幻覚 Halluzination、残留感覚 Nachempfindung)、b. 直観的な外的記憶表象 (äußere Gedächtnisvorstellung)、c. 心的現象を現在のか過去のか未来的とみて、直観に近付いてゆく非直観的で非本来的な表象。

だが大別した第一群と第二群とを鋭く別けることはできない。両群それぞれで分たれる下位群にとつても、存立するのはただ、溶暗的に消えてしまう極めて曖昧な一般概念だけである。というのも、部類クラッスが異なれば「相似性 (Ähnlichkeit)」の指す本性 (Natur) が別々となるからである。そして外へ向けては、なおも想像表象の概念と呼べるところと、もはや想像表象と呼べないところとに精確な限界を告げることができない。このような溶暗的に消えてしまう在り方は、心的現象の、外的知覚表象に算えることのできない直観的表象を全部は想像表象にたくないのであれば、主観的な感受においても生じるであろう。だがいずれにせよ区別することは、秩序保全のためにはよいことであろう。

だがこれではまだ難事が片付いたことにならない。部類クラッスの多義的曖昧さと特殊態とを簡単に見定めたからには、想像表象の真なる概念のもとに、われわれが部分的には妥当と見たし、それゆえ古来使用の呼名においても範囲においても真なる概念と仲間になれる概念あれこれを立てるがよいのか。それとも想像なる呼名の使用をあれかこれかの領域に限定するがよいのか。だが限定するならば、いかなる領域にか。

a. 古い概念しか本当は合わない領域にか。となれば、内的記憶直観 (Gedächtnisanschauung) のことであろう。だがこの扱いはほとんど推薦に値しない。内的記憶直観については特に、これが少しも話題とならないからである。

およそ誰が「想像 (Phantasie)」と言われて内的記憶直観を思うであろうか。

β. もしかすると、あらゆる記憶直観にか。これまたほとんど推薦に値しない。

γ. 主観的な感受にか。これもすでに片付けてある。しかも一方でこれまで想像表象と目されてきた現出の大部分が排除されたのに、他方で想像表象には原則として算えられない現出の多くが編入されるとは、手違いであろう。

δ. よりよいのは確かに、最大限に流布して普遍的承認を得ている群だけを取出す仕方である。このとき行着くのは以下の規定であろう——想像表象とは直観的表象に近づいてゆく非直観的もしくは非本来的な表象のことである。(ここでは第一群の第二部類^{クラス}と第二群の第三部類^{クラス}とを一纏めにしてある。) 当然ながら両表象の境界は溶暗的に消えてしまう。さらに言添えることができようが、想像表象が格別な話題となるのは、知覚表象への近接が甚しくなつて、何らかの分析とか何らかの作用とか何らかの美的経験までもが、直観的表象に結ばれるのと相似る仕方
で想像表象に結ばれるばあいである。無論このばあいでも双方の境界はまだ消えていないが、消えてしまうのは事柄の本性である。いずれにせよ想像の語が用いられてきた古来の最も重要な群はここにある。

あるいは別の策を取り、もしかすると各群の系統発生史 (Genesis) を区別決定の目印として取出すのがよいか。しかしこの策でもほとんど克服できない困難が生じる。こうしてやはり先述の事柄以外には何ひとつ残らないと思われる。そして当然そのとき迫ってくるのは、真の意義をもつ想像なる術語が本当にあるのかという疑問である。この術語は境界が鋭くないし、「直観」や「概念」なる術語ほどには重要でないとも見えるのである。だがすでに理論的学科 (Faci) では想像および想像表象は扱うべき事柄でなく、扱って遥かに大きな価値があるのは実践的学科 (Disziplin) にとつてのこと、わけても美学 (Ästhetik) にとつてのことである。

われわれの研究の帰結は、想像表象についての固有独自の教説は存在しない、ということである。われわれの定

義によれば、想像表象は一部は直観の領域に入り、一部は概念の領域に入る。両領域双方にとって大切なのは、まず現出 (Erscheinung 出来事の外見) をできる限り精確に書き記すべし」と (記述的考察 deskriptive Betrachtung)、そのあとで当の現出の成立および経過の究明 (系統發生史的考察 genetische Betrachtung) を試みなければならぬことである。これらの双つは心理学の本題であつて、ただいまの講義との関連では、これ以上に立入つて扱ふことができない。⁽¹²²⁾

(122) 想像およびいわゆる想像表象についての研究 (三三—五八) は、再度まとめて述べたいが、個々の部分で大幅に短縮、しかも諸他研究者の教説が討究され、これへの批判的意見を表明する箇所短縮してある。この処置は、さまざまな見方への関心、すなわち歴史的問題への関心が、もはや、ブレンターノが講義を行った当時ほどには大きくないからである。短縮についての明細はそれぞれの注記箇所報告してある。

われわれにとつて何よりも関心があるのは、比較による分析にもとづいてブレンターノが得た結論である。個々別々の見解にどれほど相違があろうとも、何がしかの共通点 (Gemeinsankheiten) を見出すことにブレンターノは成功したのであり、こうした共通点がブレンターノを下記の定義へ導いている——想像表象とは非直観的もしくは非本来的な表象であるけれども直観的表象へと近付いてゆく表象のことである。さよう、想像表象がとりわけ話題となるのは、近付き方が甚しくなつて「何らかの分析とか、何らかの作用とか、何らかの美的経験までもが、直観的表象に結ばれるのと相似る仕方では想像表象に結ばれるばあいである」ということは、しかしながら、直観と想像表象との区別が溶暗的に消えることである。結果として想像についての教説は、一部は直観の領域に入り、一部は概念の領域に入る。両領域は双方とも心理学に帰属する。

ブレンターノの見方によれば、芸術的創造作用 (Schaffen) の前提たる美しい (schön) 表象を呼出す (別言すれば、

性格は正しいとされる愛を以て愛することのできる表象を生む、さらに言直せば、高度の喜悦や満足を呼出すか呼出せる表象を生む）ゆえに、想像活動 (Phantasietätigkeit) は美学 (Ästhetik) にとって根柢を成す重要事なのであるから、この研究にまことに大きな重要性を与えて、ブレンターノが手稿原文の多量な頁 (Originatmanuskript II, S. 141-371) を捧げたことは理解できる。

このブレンターノの見方は、芸術的創造作用 (Schaffen) の前提を語る新来の教説群、わけてもブリッチュの理論と合致する (Gustav Adolf Brisch, 1879-1923, Theorie der bildenden Kunst, 2. Auflage, 1930)。ブリッチュによれば、造形芸術の領域における芸術的営為の成立条件は、視覚の往昔の直観 (体験 Erlebnis) に手を加える概念的加工 (Begriffliche Verarbeitung) である。このような仕方でのみ創造者の精神内に新たな形式 (Form)、新たな形態 (Gestalt) の成立が可能であり、こうした形式や形態に創造者は表出 (Ausdruck) を与えようと試みる。このような形式は「自然の焼直し (Naturabklatsch 自然模造)」ならぬ新創造 (Neuschöpfung) だが、しかし先行せる往昔の直観の本質的特徴を含んで、意識内の直観像 (anschauliches Bild) として成立する形式である。ブレンターノが「非直観的もしくは非本来的な表象」と語って表しているのは、編者の私が思うに、かかる表象は先行する往昔の直観と、完全には合致しないが、しかしブレンターノの強調するように、多かれ少かれ当初の直観的表象に近付いてゆく、ということであり、取りも直さず、かかる表象には直観の性格と言える徴標が付いている、ということである。かかる表象を述べるには「直観的概念 (anschaulicher Begriff)」こそが最も適切な語であるとしてよからう。

付記

締切日なしでは書けないよ、といつもの嘆きが会席で洩れた。ふと思立ち診ていただけるかと願うや、いい

よ、の即答である。第一便は二〇一四年五月二十一日、やがて毎月末が締切日となつて最終便は二〇一六年九月二十三日、こうして全文の草稿が成つた。うるさく御迷惑なことであつたに違いない。この翻訳は杉野正教授の御好意の賜物である。畏い先輩を親しく戴くことのできた幸を思い、御寛容のほどに心からの感謝を捧げる。

二〇二〇年九月

訳者

『美学綱要 (Grundzüge der Ästhetik)』(一九五九年)

内容概観 (Inhaltsübersicht) [承前]

一 心理学および美学の選り抜きの疑問

五一、知覚とは、何かが、表象される(知覚される)何かがある、という即応的認識のことである。肯定する明証的判断であるが、概念から納得される判断ではなく、経験認識たる判断である。向うところは特定の(個的な)実在的対象である。

五二、となれば知覚表象は知覚の基底を成す表象である。内的知覚だけが知覚の名に値するのであり、いわゆる外的知覚は即応的認識でない。

五三、したがって想像表象という概念は、首尾一貫せる同族概念として改造すべきものであろう。

五四―五五、知覚表象と想像表象とを区別させる判定基準の樹立に努めた従来の試みは、ほとんど満足できるものでない——このことが個々に詳しく示される。

五六、知覚表象と想像表象とは双方の対象の点で異なる。すなわち知覚表象と想像表象とのあいだに相似性は確かにあるものの、この相似性はしばしば乏しい。

五七、想像表象とは取りも直さず非本来的表象作用なのである。

五八、非本来的表象は、諸他の契機と結ばれた然るべき直観的現象を含んでいるか、直観的要素が全然ないか、のいずれかである。

五九、一般に想像表象として認められている表象群を調べると以下の定義が生じる——想像表象とは、直観的表象に近似する非本来的表象のことである。無論この概念規定は鋭さを欠いている。近似の程度が無規定のままだからである。想像表象についての教説は、ある部分は直観の領域に属し、ある部分は概念の領域に属して、いずれにせよ心理学に帰属する。

編者の序言（一九五七年）（承前）

フランツィスカ・マイヤー＝ヒレブランド

本書の第二部には、美しいもの、「美」の概念規定と表象の価値関係とへ向う専門的考究論文を一緒に纏めてある。双方へ向けての疑問は極めて密接に連関するのである。

すでに述べたがプレントナーによれば、われわれには美しいものを即応的洞観で把握できる力がある。それでは何が美しいのか。いかなる表象にも何らかの価値ありとするのは正しいとしても、表象がいずれもすべて美しいとは言われない。すなわち先述のごとく、世には価値のまことにさまざまな表象が存在するが、なかで美しいと呼びかけているのはただ飛抜けて価値ある表象だけであって、（プレントナーの意味で）より詳しく言直せば、美しいのは、ただ愛らしい（liebenswert 可愛）と認められるばかりか実際にも気に入られる（geliebt）表象である。しかもこうした表象には、ただの全般的な満足だけでなく特殊的な高度の満足をも呼起せるほどに多大な価値が具わっていないなければならない。

比べると大きな善は小なる善より常に勝れているからには、性格は正しいとされ比べて大きな満足の向う表象の方がいつでも優位となる。そのさい表象の価値について何らかの普遍的法則が立てられる。例えば、より大きな充実と多様性ある表象は即自的にも対自的にも価値が大きく、心的なるものの表象の方が物的なるものの表象よりも勝れ、本来的表象の方が非本来的表象よりも、直観的表象の方が非直観的表象よりも勝れていることになり、纏めると、よりよきもの（より可愛らしいもの）の表象の方がよきこと劣れるものの表象よりも価値が大きいのである。

だが、これで表象の価値の判定基準を論じ尽したとするつもりはプレントナーになく、ただ一定の方向を示した

だけ、どのように拡充するかはあくまで意中のことであつたとしてよからう。ブレンターノにとっては何よりも、積載能力ある基底を美学のためにも築くことこそが大事であつた。

さらに重々しい異論とは一層綿密に取組まなければならない。「美しい (schön)」という概念のブレンターノによる定義が鋭さに欠けていることは、その通りであらう。

いかなる表象作用もそのまま価値あり (wertvoll) として、つまり愛らしい (liebenswert) として捉えてよいが、美しい (schön) のはより高い価値ある表象作用だけとあらば、当の、より高い価値はどこで始まるのか、これが問題となる——ブレンターノの示唆をあらためて吟味したい。求められるのは実際に気に入られること (Erfachlich & [Gefallen]) であり、しかも高度に満足させられること (ein hohes Maß an Wohlgefallen) である。これら双つの規定には主観的なるものが纏まわる。だが主観的因子が本当に与えられるのは芸術作品査定のとくと思われる。芸術家の作品はただ当の芸術家の人格に依存するばかりでなく、当人の時代にも根差しており、相似たことが追体験する者についても言える。ある芸術作品がひとりの気に入るところか、この人を深々と魅了するのに、別の人にはあくまで冷やかで、嫌な代物と顔を背けさせることすら起り得る。ミュラー＝フライエンフェルス (Richard Müller-Freienfels, 1882-1949) の文章が疑いなく当嵌るのである——「夜中の見張りにとつてゴッホの絵は一枚の染みだらけの亜麻布であつて芸術作品でない。美的に感受する心がはじめて亜麻布を芸術作品にする。だが美的に感受する人も決して皆が同じではないゆえに、芸術作品は心的対象として決して精確に同じものでなく、厳格に見れば、一箇の物質的対象については人々の数ほど多くの心的対象が存在する」(Psychologie der Kunst. 3 Bände. Band I. S. 27)。

いかなる表象作用にも価値あることは認識可能 (erkennbar) にして、より勝れたものはより大きな満足によつて判る、とするならば、右のごとき主観性を排除してはならないのではないか。答は当の「認識可能」の語を重んじ

て、認識の可能性ではまだ認識の事実性は保証されていないと返される。概念の分析にとっても個人的体験にとっても、多かれ少かれ完全に与えることのできる一定の前提条件が必要なのである。

こうしてわれわれはブレンターノとともに、幾つか美学の根本命題は確かに普遍的かつ必然的 (apodiktisch 必証的) として納得できるものの、しかし在庫価値の体験は、ただ現有高に間違いないとの断言的性格を具えているだけで、当の価値の実現可能性は芸術家や芸術追体験者の発展状態如何による、という結論に達する。言いかえると、表象の把握は当の内的価値については可变的事情に依存するのである。

この成果は、ひと目では恐らく幻滅ものであろうとも、やはりわれわれの経験と合致するし、芸術作品の評価に見られる種々さまざまな相違をよく説明できる。それゆえわれわれは、「美しい (schön)」という概念は正しいと性格付けられる事実的満足を内的に体験することから出てくるが、このような満足が個々の事例で成立するか否かについては確実なことが言えない、とブレンターノが断言するとき、あくまでブレンターノは正しいとしなければならぬであろう。

「勝れた価値ある表象 (Vorstellung von überragendem Wert)」なる言葉で示されているのは、ただ、具体的事例では何かの表象に高い満足の向うことも起り得るが、多くの例では表象の価値自体があまりにも乏しくて全然気付かれもせず当の表象はいわばどうでもよく思われる、というだけのこととしたい。厭 (mühsam) な表象と呼ばれるのは主として、表象に随伴する出来事や連想される作用への本能的嫌悪 (Unlust) をさまざまな事情が催して、この表象が気持好さを遙かに越える気持悪さを引起すときである。

無論このような漸次的価値段階は論理学や倫理学の領域では見出せない。明証的 (evident) なるもの、つまり正しいと認識 (als richtig erkennbar) できるものはいつても「真 (wahr)」と呼ばれることを求めるし、性格は正しい

とされる愛を以て愛し得るものは「善 (gut)」と名付けてよい。しかしここでも明証的に認識可能なるものすべてが、実際には必ずしも明証 (Evidenz) と一緒に認識されないし、それゆえ必証的 (apodiktisch) にであれ断言的 (assertorisch) にであれ明証的な認識作用についても、同じように主観的因子は存在する。相似たことは情動の体験作用にも言えて、そうでなければ良心の迷い (irriges und zweifelndes Gewissen 迷走的懷疑的良心) など存在しないことになろう。

表象作用の領野では満足の漸次的差異によって対立のごときものが生じるかに見える。美しい醜い、という呼名が真偽や善悪を思わせるのである。だが力説しておきたいのは、ブレンターノでは「醜い (häßlich)」はより乏しい価値を指すだけであって、決して「偽 (falsch)」や「悪 (schlecht)」には含まれている無価値 (Unwert) を指してはいないことである。

芸術の分類および芸術の評価を扱う本書第三部では、とりわけ、論文「芸術の分類に向けて (Zur Klassifikation der Kunst)」が際立つ。前半では感官を視覚と聴覚と共通感官 (いわゆる低級感官はここに纏められる) とに別ける分類が示される。分類基準としては明快性 (Heiligkeit) と暗昧性 (Dunkelheit) なる奇妙な対立が動員される。ブレンターノによれば、同じか相似るだけの感官で明るいと呼べるか暗いと呼べるかによって品質の部類は一となるか多となるかである。これに反して今日大方の感官心理学者は、感官品質の部類はさらに多くを区別しなければならぬ、との立場を取っている。けれども見方の相違に詳しく立入る必要はない。というのもここで大切な芸術の分類では基礎として別箇の原理をブレンターノが据えているからである。目に向う芸術と耳に入る芸術とは確かにはっきりと区別できるが、低級感官 (Gemeinsinn 共通感官) によって伝わるというような芸術はないし、芸術での低級感官の協力はただ間接的にでしかない。諸芸術の本来的区分原理は多かろうと少かろうと精神性 (Geistigkeit) であ

る。芸術がどれほど多く、どれほど高次の概念を呼起せるかの程度次第によって、それだけ大きな価値が当の芸術にはあるとされる。それゆえ以下の順位が生じる。上位に立つのは最も精神的な芸術としての詩文芸 (Poésie) である。概念は言葉「語」と結ばれていて、そのまま言葉で差出される。続くのは造形芸術(さまざまな下位種類あり)で、まさしく、あれこれの形姿で概念的思考作用が鼓舞され規定されるからである。比べる音楽には最後の地位を指定しなければならぬのは、音楽の向うところが概念的思考作用よりもむしろ感官の方へだからである。

芸術の順位の原理として「精神性」の程度が立てられるのは、あくまで筋が通っている。心的なるものの表象は物的なるものの表象に優先させてよいし、より愛らしい(よりよい)ものの表象は、より低いという、感覚を当てにするものの表象に優先させてよいのであるから、ブレンターノの言う順位は責められたところで高々、ブレンターノの意見でも表象の価値はやはり直観性が増すにつれて増すはずなのに、概念は知覚表象(感受)ほど直観的でない、というぐらいのことになる。だがこの非難とて論破されるのは、さきに述べた通り、思念される想像表象では知覚に相似る直観的表象が大事となるからである。

しかもブレンターノでは「直観的 (anschaulich)」の語は個的規定 (individuell bestimmt) ありという意味では用いられない。知覚表象と直観とを詳解する講義「心理学および美学の選り抜きの疑問」[本誌訳稿]の結尾でブレンターノは、想像表象が扱うのは非本来的 (uneigentlich) 表象であり、確かに直観的核心は与えられる、もしくは直観が少くとも表象成立への刺戟となるではあろうが、そのさい本来的に思惟されるのは当の直観の名で思付かれるものとは別の何かである、この成果に達する。言いかえると当の何かは具体的所与を超えて聳える象徴表象 (Symbol-Vorstellung[en]) である。それゆえ「直観的」なる属性と結ばれるのは、表象する人の精神内に生起する新たな形態であり、いわば一箇の直観的概念である。

ブレンターノ後年の教説では、われわれはおよそ個的に規定 (individuell bestimmt) される表象をもつことなく、われわれの表象はすべて多かれ少かれ普遍的 (allgemein) である (Psychologie vom empirischen Standpunkt II. Neue Abhandlungen aus dem Nachlasse, S. 199ff.)。したがって「直観的・抽象的」の別、また「個的・普遍的」の別はもはや漸次的な区別でしかない。

だがなおも言うべきことがある。

「精神性」は概念の豊かさや種類にばかりか、わけても創造的活動の大小多少に依存する。ブリッツェ (Gustav Adolf Britsch, 1879-1923, Theorie der bildenden Kunst, Bruckmann München 1926 [1952]) とともに語れば、新たな精神的連関 (neue geistige Zusammenhänge) に依存するのであるが、この連関が作られるのは、知覚材料 (受容された感官印象) の加工という、芸術家の意識内で生じる作業によってのことである。卓越せる意味で創造的 (schöpferisch) と名付けてよい、この精神的活動こそが格別ブレンターノの念頭にあったのは確かである。

ブレンターノの美学的著述の意義を再度まとめて強調したいと思えば、何よりも言うべきは、まさしく論理学および倫理学のばあいと同様に、確固たる基底 (ein festes Fundament) をブレンターノが美学に与えている、ということである。

何らかの表象にはつきり覚える、即応的満足と、この満足は正しいとする、同時的洞見とが、いまここでの大事は、勝れた価値あつて美しいと呼んでよい表象である、ということを保証する。

この批評基準に反対する抗弁はすべて、判断の明証に反対する抗弁や、この愛は正しく、したがってこの愛の対象は善いと捉える洞見性に反対する抗弁と同様に、黙さなければならぬ。

もとより「美しい」という規定には真や善の規定よりも大きな不確実性の付纏うことを認めなくてはならない。

だがこうなる理由は、当の規定がまさしく漸次的相違によって複雑になるといふ事態にある。何らかの表象に性格は正しい明白な楽しみ（高度の満足）を事実として体験することこそが決め手であるのに、このことが個々の例では、「趣味（Geschmack）」の発達状態がまことに多種多様であるゆえに、必ずしも誰にでも可能とは言えないからである。

判断の明証（Evidenz）を説き、心情活動の領域における明証の類比体を説くブレンターノの明証論から出立する人ならば、この教説から造作なく美学への橋をも見付けて、堅固な土台上で美学の建立を進めることができよう。だがこの明証論や正しいと性格付けられる愛や楽しみという教説に賛同できない人々にとつても、興味深く多々この領域でも変革的なブレンターノの見方と対決することは欠かせないとして疑いない。

しかもブレンターノはただ美学の基礎付けに携わるばかりか、自身の教説の仕上げという点でもすでに立派な成果を挙げている——きわめて重要な多くの問を投げかけるだけでなく、答を全面的にか部分的には返しているからであり、例としては「天才」「想像活動」「芸術の分類」についての詳述を思うだけでよろしかろう。

こうしてブレンターノ一生の仕事はその美学的著述を取込まなければ完結しないと言ってよい。この空隙を埋める本書は、まさに冒頭で述べた通り各書それぞれで実践的哲学の主要学科が扱われる限りで、既刊の『正判断論（Die Lehre vom richtigen Urteil）』『倫理学の基礎と構築（Grundlegung und Aufbau der Ethik）』と併せての一体となる。

本書の校訂にはかなりの困難があり、責任重大な決断もあった。ここに纏めた諸考の多くはやはり短縮をも補足をも必要とした。一方で、旧聞の諸研究に関する批評的論説を今日もはや必ずしも全部が最重要ではないとして縮約することはできたと思うが、他方で、ほんの素描でしかない、また思想の暗示が標語でしかない部分は詳述しなればならなかった。このことが特に言えるのは講義「心理学および美学の選り抜き疑問」であり、しかもこれは本文を双方から引いた二冊の講義草稿が現存するのである。

原本である手稿の補足および変改はそのつど精確に注として明記してある。誤読の虞ある箇所では長文の注記が説明に役立つ。既刊の書だが久しく絶版の『天才 (Das Genie)』および『詩文芸の呈示対象としての悪 (Das Schlechte als Gegenstand dichterischer Darstellung)』【両書とも岩波文庫「天才悪」所収】にブレンターノ自身が加えた注解は、これとして解るようになっている。

遺稿から編集して公刊のブレンターノ著作集全部に掲げる詳細な「内容概観 (Inhaltsübersicht)」は編者の私が添えたものであり、「人名・事項索引 (Namen- und Sachregister)」【本論叢では割愛】も同様である。

どうか本書もまた、ブレンターノがどれほど高い能力の持主であったか、と示すのに役立つように——われわれの認識の最重要問題と取組んで、見たところ遠いもの同士のあいだに連関を見出せるばかりか、それぞれ解決すればわれわれの知を促して暗さを払うに役立つ特殊問題にも没頭できる、という能力のことである。われわれは偉大な研究者に批判的明敏をも創造的想像をも求めるものだが、これら双方がブレンターノの人格では稀有な具合に一体となっていたのである。

インスブルックにて 一九五七年の復活祭に

「フランツィスカ・マイヤー＝ヒレブランド」

「直観の現象学の史的源泉」^(*)

エドゥアルト・マールバハ

(*) フツセル全集第二十三巻は『想像・像意識・記憶』と題される大冊であり、一八九八年から一九二五年、すなわち現象学確立期の苦闘を刻む遺稿の全三十篇が、それぞれに附せられた「第一Nr.」から「第二〇」の番号順に収められている。編者はマールバハ (Eduard Marbach, 1943-) であり解題の序文では本書全体の性格を大観したのち以下の三段を設けている。

遺稿順序説明 (Textgeschichtliches)

直観の現象学の史的源泉 (Historischer Ursprung……)

問題展開 (zur Problementwicklung……)

この「直観の現象学の史的源泉 (Historischer Ursprung der Phänomenologie der Anschauungen. SS. XLIII-L)」の一段がまさしくフツセルとブレントノーとの関りを詳述する部分であり、本誌に今回訳出の「想像力考」の性格把握には貴重な資料として、ここに全文を翻訳紹介する。なお原文では s.o. (↑ siehe oben 上記参照) s.u. (↑ siehe unten 下記参照) なる記号を散見するが、抜粋せる断章の本稿訳文でも、資料としての意義を重んじて、説明は加えないまま移しておく。

訳著

翻訳の底本は左記の通りである——

(Edmund Husserl, Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung, *Husserliana* Band XXIII, zur Phänomenologie der anschaulichen Vergegenwärtigungen. Texte aus dem Nachlass (1898-1925), Martinus Nijhoff 1980, SS. LXXXII+724)。

一九〇四—〇五年冬学期講義「現象学および認識論の主要部分」の第三部分が本巻に「第一」として再録する原典だが、講義最初の時間に「知覚・感受・想像表象・像表象・記憶などやや漠然たる見出語で誰もが知っているが、しかし学問的にはまだあまりにも僅かしか吟味されていない現象」(s.o.)との関連でフツセルは語る——「こうした問題と取組む最初の刺戟を私は天才的な布伦ターノ先生に負うていて、早くも一八八〇年代半ばにウィーン大学で先生は「心理学および美学の選り抜きの疑問」について私には忘れられない講義をなされたが、この特殊講義(毎週三時間)での御努力は、ほかのことは斥けてと言つてよいほどに、知覚表象と比較しての想像表象の分析的解明であった」¹⁾。そして第三部分自体の冒頭で以下のごとく述べている——「知覚表象と想像表象との関係という問題は多くの真剣な努力の的であった。文献としては、単行書では確かに例外的にしか、また例外ゆえか、かなり表面的にしか扱われてこなかった。だがこの問題には重要な人々がさまざまな連関において、しかも問題を決して軽々しく見てはいないと解る仕方で言及してきた。けれども文献よりはるかに深いものを時折の講義が提供したし、ここで私が思出すのは、布伦ターノ独自の講義が問題を扱った極めて明敏な流儀である。またシュトゥンプフ [CaH Stumpf, 1848-1936, 布伦ターノの門弟] が自身の心理学講義で語った精妙な抜いも、文献が提供するものをはるかに凌駕していた」²⁾。

- (1) *Husserliana* X を参照のこと。この箇所は同書ベーム (Rudolf Boehm) の序文 (S. XVI) に引用されている。
 (2) 本巻 *Husserliana* XIII, Nr. 1, S. 6f. を参照のこと。

惜しいことにブレンターノの講義「心理学および美学の選り抜き疑問」(一八八五—八六年)³⁾のフッセルによる筆録は見当らず、亡失と見なくてはなるまいと思われる。他方「ハレ大学一八八六—八七年冬学期シュトゥンプフ教授の心理学講義」⁴⁾のフッセルによる筆録は現存し、なかで大きな一段が「想像表象の研究」に費されている。ここの「第二章 感覚内容の想像表象」にはフッセル後年の手による精査の痕が見えるが、多分これは一八九八年論文 (s.o.) か一九〇四—〇五年講義との繋りで生じたとしてよからう。シュトゥンプフは感受と想像表象との主要な二つの内的相違「区別」を詳細に論じる——まず同じ呼名の感受に比べて想像表象では(一)表象の強度 (Intensität) が極端に乏しいことと、(二)内在的附随的な標徴の充実 (Fülle) が乏しいことについてである (手稿 Q111, S. 238ff.)。つぎに双方の成立の仕方に関連する二つの内的相違として(一)表象の持続性ないし流動性や変動性がより乏しいことと、(二)特に、いかなる物体の動きもない空間内での恣意的な補完可能性や変更可能性について、そして最後は、心理学的後続現出に関する二つの相違で(一)成人が表象するものの方がは根拠にもとづいてしか現実とは見做されないのに、感受するものは即座に現実と見做されることと、(二)普通のばあい表象には、同じ内容の感受よりも随伴する感情が乏しいこと、についてである (手稿 Q111, S. 288ff.)。これらブレンターノもすでに吟味した相違の多くはフッセルによっても一八九八年の論文「想像と像表象」(Phantasie und bildliche Vorstellung, in: *Husserliana* XIII, Beilage I 原典批判の注記, 以下に S. 632ff. を参照のこと) や一九〇四—〇五年の講義 (*Husserliana* XIII, Nr. 1, 以下に I. Kapitel 8: 6. 5. Kapitel, 部分的には 6. Kapitel 4 及び 9. Kapitel) で論じられた。

(3) ブレンターノの講義は二冊の手稿綴本をもとに短縮して整理された体裁で編者フランツィスカ・マイヤー＝ヒレブランドによって遺稿から刊行された——Franz Brentano, *Grundzüge der Ästhetik*, Bern 1959, S. 3-87. 編者の注記 S. 225-236 および序言 S. XIVf. をも参照のこと。[邦訳「ブレンターノの想像力考」聖心女子大学論叢第一三四—一三六集 二〇一九—二〇二〇年]

(4) „Vorlesungen über Psychologie von Professor Carl Stumpf, Halle, Wintersemester 1886/87“——ルーヴェンの Husserl-Archiv Leuven の Q11/1 und II の番号下に保管されている。ウイーンで一八八四—一八八六年に師事せるブレンターノを離れて一八八六年秋にフッセルは、教授資格取得のためブレンターノの推薦でハレ大学へ行き、シュトゥンプの講義を聴いた (Husserl-Chronik S. 17ff. 参照のこと)。

書添えたいが、フッセル夫人 (Marvine Husserl, 1860-1950) 配慮の写し^{コペイ}、ブレンターノ学徒マルティ (Anton Marty, 1847-1914) がプラハ一八八九年夏学期に行った講義「発生の心理学 (Genetische Psychologie)」筆録の写しもフッセル遺稿内にある (ルーヴェンの Husserl-Archiv の Q10 の番号下に保管)。なかでマルティは想像表象をも詳解するが、部分的には明かに、ほとんど文字通りブレンターノ一八八五—一八八六年講義に結付けてのことである³¹⁾。

(5) ブレンターノ教説の討究にあたり、この講義筆録をフッセルが拠り所に行っていることは明かである——*Husserliana* X, Nr. 14, S. 171ff. 参照のこと。

このマルティの講義³²⁾、だが今日では何よりも *Grundzüge der Ästhetik* 「上注 (3) 『美学綱要』」で読めるブレンターノ自身の講義は、「知覚表象と比較しての想像表象の分析的解明」(s.o.) では本質的にブレンターノが、本来的

(eigentlich) 表象と非本来的 (uneigentlich) 表象とを分つ自身の区別へと立返ることを示しているが、この区別の真価は、同じ冬学期の先立つ「初等論理学講義」でも前以てブレンターノが発揮させていた。⁶⁾ 美学との連関でブレンターノは想像の分析を導入するのだが、このとき直ちに、想像考察に属する更なる連関について示唆していた——「美学にとっての意義が最も大きいのは心理学に属する想像「力」論である。だが想像を扱うのに、ほかの事柄、概念的表象と直観的表象との区別とか、ことに、想像が本質的に制約される感受のごとき事柄にも立入らずに済ますことは不可能であろう。こうしたすべては美学にとって最高度に重要であるばかりか、芸術家の生や研究者（数学者さえも）の生どころか各人だれの生にとっても作用広汎な実践的意義をもつ事柄である。したがって表象、生活の研究は心理学の最重要課題に属する」。⁷⁾

(6) Edmund Husserl, *Erinnerungen an Franz Brentano*, in: Oskar Kraus, *Franz Brentano*, München 1919, S. 153 und 157. 邦訳 フツセル筆「フランツ・ブレンターノの想出」(聖心女子大学論叢第一三三集) 一三頁および一七頁。

(7) 上掲書 *Grundzüge der Ästhetik*, S. 36. 部分的に強調語あり。邦訳「ブレンターノの想像力考(中)」(聖心女子大学論叢第一三五集) 一一頁。

「フランツ・ブレンターノの想出」(上注6)においてフツセルは話題のブレンターノ講義を「ずば抜けて刺戟的であったのは、研究する流れのなかで諸々の問題を示していたからであり」(S. 157. 邦訳一七頁)と称揚している。哲学的概念を形成するフツセルの没歴史的 (ahistorisch) で形相反省的 (reflexiv-veidisch) な流儀とは対照的にブレンターノが目立つのは、哲学的伝統との絶え間ない対決で、いわば「諸々の概念内で動く (in Begriffen bewegt)」姿である。右の講義でブレンターノは述べていた——「これから没頭すべき課題は想像についての研究である。……

何よりも必要なのは想像の概念を規定することであろう。概念規定の方法は、問題が術語の新たな導入にあるばあいと、伝承された術語の規定にあるばあいとは、本質的に別である。ブレンターノによれば「伝承された術語では伝統を顧慮しなければならない」「それゆえに大切なものは、この術語のもとに私 (Ich) が理解するところばかりか、ひと (man) が理解するところをこそ理解することである」(S. 411 邦訳一七一一八頁)。この局面でブレンターノは「アリストテレス (先んじてはソクラテスやプラトン) の教えたように」進むことが有益と見る——「a. さまざまな使用例の枚挙 b. 諸例に共通なるもの研究 γ. 諸他見解の枚挙と研究 δ. 諸結果の比較」(S. 411 邦訳一八頁)。あとになおブレンターノは強調する——「伝統を顧慮せよ、との要請が求めているのは無条件の伝承固守でなく、ただ、伝承からは軽率気儘に離れないようにということだけである。……今日なお若い学問と呼んでよい哲学 (ことに心理学) においても、引継がれた術語を吟味するという、この、いかなる概念規定でも課題となる部分は大きいに顧慮しなくてはならない」(S. 42 邦訳一九頁)。

哲学的伝統、すなわちアリストテレスからスコラ哲学を越えてヴォルフやカントに至り、とりわけ impression (印象) と idea (観念) とを分つヒュームの区別からリード、J・ミル、ベイン、J・S・ミルへ、最後にはドイツ語圏の新しい思想家たち、ヘルバルト、ロツツェ、フェヒナー、ヴントへとという伝統における想像の概念を詳しく検討した後に、総括してブレンターノは以下のごとき考察結果を得た——「伝統的概念によれば確かに知覚表象でないが、しかし想像表象は知覚表象に相似 (ähnlich) のものとすべき表象である、ということをわれわれは見出した。この相似性が大きければ大きいほど、それだけ多く想像表象は話題となる。けれども想像表象という呼名がしばしばこの概念と合わない範囲で用いられていたことも明かになった。……さて、このような事況のもとで何をすればよいのか、どのように想像表象の呼名を用いればよいのか。……よりよいのは確かに、最大限に流布して普遍的承

認を得ている群^{ゲグレイ}だけを取り出す仕方である。このとき行着くのは以下の規定であろう——想像、表象とは、直観的表象に近付いてゆく非直観的 (unanschaulich) もしくは非本来的 (uneigentlich) な表象のことである。……当然ながら「両表象の」境界は溶暗的に消えてしま^う」(S. 84. 86。部分的に強調あり。邦訳「ブレンターノの想像力考(下)」(聖心女子大学論叢第一二六集) 五九頁。Husserliana XIII, Nr. 1 84. 5. 92ff.におけるフッセルの、想像概念のブレンターノによる規定について語る言及を参照のこと)。直観的知覚表象へと近付くのは、ブレンターノによると「想像表象がいれば直観的核心をもつ」(S. 84. 邦訳右記(第一三六集) 五六頁) ことにもとづいている。そして事実、ふつうの想像表象は「直観でなく、直観を核とする概念としてよい」(S. 88. 邦訳右記(第一三六集) 五五頁)。講義を結んでブレンターノは言う——。「われわれの研究の帰結は、想像表象についての固有独自の教説は存在しない、ということである。われわれの定義によれば、想像表象は一部は直観の領域に入り、一部は概念の領域に入る。両領域双方にとって大切なのは、まず現出「出来事・外見」をできる限り精確に書き記すべきこと(記述的考察)、そのあとで当の現出の成立および経過の究明(系統発生的考察)を試みなければならないことである」(S. 85. 邦訳右記(第一三六集) 五九頁)。

このブレンターノの講義からフッセルが最高度に重要な実質的刺戟を受け、また特にヒュームおよび十九世紀イギリス経験論者への哲学史的示唆を得たことに疑いはない。本書後段の問題展開史素描 (s.u.) で示すことになろうが、想像もまたこのような作用の一つであると語った非本来的表象作用のさまざまな在り方の、ブレンターノによる展示はわけても、最も実り豊かにフッセルの思考を驚かせ、のちの批判的深化へと促したに違いない。早くも一八九一年の著書『算術の哲学』でフッセルは、ブレンターノ以前には誰ひとり十分に捉えなかつたとしてよい意義、すなわち「われわれの心的生活全体にとつての非本来的……表象作用の卓越せる意義を解する、より深い理解」を、自分はフランツ・ブレンターノに負うている、と記している。⁸⁾ 一九〇四—〇五年講義の第一時間目にフッセルは、

ブレンターノが一八八五―八六年特殊講義で行った「知覚表象と比較しての想像表象の分析的解明」への参照を指示したのち、以下のごとく述べる——「ことに十年ほど経てますます纏れてきた私自身の研究は、もちろん本質的な諸々の点で別なる道へと私を導いて、わけても、こうした問題は当時のブレンターノが見ていたよりも遙か桁外れに複雑、度外れて困難な問題である、と教えてくれた」⁽⁵⁾。このときフッセルには自身の一八九四年の「初等論理学のための心理学的研究 (Psychologische Studien zur elementaren Logik)」や一八九八年の論文 (s.o.) のことが、また事柄自体については自身の、表象作用の概念における、純粹記述的分化 (Differenzierung [en]) のことが念頭にあったとしてよからう。当の事柄 (Sache) がフッセルを、概念的表象と直観的表象との鋭い対立では、直観的表象自体の内部における精妙な区別へと導いたのである (s. 注)。

(8) *Husserliana* XII (編者 L. Eley), S. 193, Anmerkung I.——強調語あり。フッセル初期著作において表象作用の本来性と非本来性との区別がもつ意義については *Husserliana* XIII, *Aufsätze und Rezensionen* の B. Rang. による序文、特に S.XXXVII. および S.XXXXV, *Anmerkung 2* を参照 (s. 注)。

(9) *Husserliana* X, R. Boehm の序文 S. XVI から引用—強調語あり。

さきの一九〇四―〇五年講義最初の時間でフッセルは、一八九〇年代の仕事を一瞥したあとに付加している——「しかしこうした問題の完全なる体系的決着には、当時の私はまだ達し得なかった。別々に孤立させると問題を解決できないことは……現象学的問題の内的錯綜および、まさしく当の問題の特性とも関連するのである。……」(*Husserliana* X, S. XVI)。つづけて述べるには、当時「記憶の全領界は、また、ともども根源的時間、直観の現象学の問題全体も、……いわば黙殺のままであつた」(*Husserliana* X, S. XVI)。だが後年となる一九〇四―〇五年講義の開始部

分で、まさしく新たな算入、すなわち直観的表象群の内部における諸分化 (Differenzierung [en]) を深く掘り下げる究明のために、根源的時間意識を算入することが生じた」(本巻 *Husserliana* XIII S.Nr. 1, S. 44) と S. 92 および *Husserliana* X, *Die Vorlesungen über das innere Zeitbewußtsein aus dem Jahre 1905*, S. 3ff. 参照のこと)。この冬学期のあとフッセルはフランツ・ブレンターノへの手紙で書くことができた——「クリスマスからの講義で想像および時間の記述心理学を扱い、格別この講義で悩まされました。けれどもそのあいだ先生との近しい精神的関係には欠けるところがありませんでした。一八八五—八六年ウィーンでの先生の素晴らしい講義についての私の古い筆記帳から選り分けて、多くの部分を学生たちにも読上げ、分析を先へ進める原点といたしました。微妙これ以上のごとく絶望に追込まれるほど難しい問題を扱うには、このたびの私に自分で差出すことのできたものは、あまりにも不完全でありました」(一九〇五年三月二十七日付書簡—Kopie im Husserl-Archiv Leuven)。